

## 《文心雕龍》研究序説

著者	門脇 廣文
号	193
発行年	2002
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14606">http://hdl.handle.net/10097/14606</a>

かど      わき      ひろ      ふみ  
門      脇      廣      文

学位の種類      博士(文学)  
学位記番号      文 第 193 号  
学位授与年月日      平成14年 7 月25日  
学位授与の要件      学位規則第4条第2項該当

学位論文題目      《文心雕龍》研究序説

論文審査委員      (主査)

教授 花 登 正 宏      教授 中 嶋 隆 藏  
教授 三 浦 秀 一  
教授 安 田 二 郎  
教授 佐 竹 保 子

## 論文内容の要旨

《文心雕龍》は、六朝時代の齊梁兩王朝の交替期にあらわされた文學理論の書である。この書が、文學批評の專著として中國の文學史上にひとり卓越していることは周知の事實であると言ってよい。そしてそのように卓越していることの要素の一つとして、中國の文學理論の書や文學批評の書にはあまり見られない「體系性」を有しているところがあることを認めなければならない。そして、それが「體系性」を有しているということは、そのようにさせている思想や論理が、その背後に嚴然と存在していることを意味しているはずである。

そのため、中國においてもここ五十年、その思想性や論理性をめぐってかずおおくの論考が公表されてきた。そして、さかんな論争がくりひろげられることもあった。それらの論争は、たくさんのおおくの見べき成果をあげたと言えることができる。しかしながら、それらの議論のおおくは、表面的なものに終始していたり、あるいは畫一的に過ぎなかったりなど、なお不十分どころがなかったとは言えない。

しかし、この書のそれぞれの篇に多岐にわたって表明されている思想や主張を表面的に一讀したかぎりでは、思想的統一性が欠けているかのような印象を受ける。なぜなら、相互に矛盾し、あい容れないと考えられている二大思想、すなわち儒家の思想と道家の思想が混入しているからである。さらには、佛教の影響も認められる。思想的統一性が、はなはだしく欠けていると見られてもやむを得ないように思える。

その代表的な一例をあげておきたい。それは、この書の冒頭の章においてすでに認められる。

〈原道〉第一の篇の題にもなっている「道」の概念は、儒家の言う人倫の「道」ではない。むしろ道家思想に見られる天地自然の「道」である。にもかかわらず、それにつづく〈徵聖〉第二の「聖」は、もちろん儒家の言う「聖人」であって、道家の尊崇するひとびとではない。また、〈宗經〉第三の「經」も、言うまでもなく儒家の經書であって、道家の書ではない。

上に述べたような事實にたいし、《文心雕龍》全體を鳥瞰してみると、それが一定の論理に貫かれているであろうこと、また、ある統一性を有した整然たる體系として構成されているであろうこと、劉勰がそのように意識して構成しているであろうことは容易に推察できるのである。そのためであろうか、一九六〇年前後、中國において、《文心雕龍》の基本思想の認定についてさかんな論争が繰りひろげられた。しかし、みずからの思想的立場に固執するあまり、あるいは、個別の語に拘泥するあまり、牽強附會ともおもえる主張におちいってしまうことも少なくなかったように見られる。

一方、日本では、《文心雕龍》の基本思想を認定しようとする試みはあまりなされていない。だが、この書の基本思想について、おおむね承認されているのは、《文心雕龍》の思想的根據、とくに冒頭五章「文之樞紐」の思想的根據は「易哲學」である——という見解である。

筆者も基本的にはこの立場にある。しかし、筆者は、「易」そのものの思想ではなく、「易」および易解釋に見られる「思考の様式」を問題にしている。このことについては、第一部の第一章で論じた。

《文心雕龍》冒頭の五篇、〈原道〉〈徵聖〉〈宗經〉〈正緯〉〈辨騷〉は「文之樞紐」とされている。〈原道〉は「道」について、〈徵聖〉は「聖人」について、〈宗經〉は「經書」について論じたものである。それらの三章については、「經書至上主義」を標榜するものとして、大きな問題はない。しかし、うしろの二つについては問題がないわけではない。

《文心雕龍》第四章の〈正緯〉篇は、いわゆる「緯書」について論じたものである。「緯」とは、織物の「よこ糸」のことで、「經」、すなわち「たて糸」にたいするものである。「經書」が織物の「たて糸」のように世界を縦<sup>たて</sup>につらぬく中心的なものであるのにたいして、「緯書」はそれを横から補足する補助的なものであるとして、そのように名づけられたのである。

「〈原道〉→〈徵聖〉→〈宗經〉」という文脈を視野にいれて考えてみると、劉勰の基本思想は儒家思想だという主張も決してまちがっている考え方ではない。〈正緯〉であつかわれる「緯書」も、その文脈においては、異質なものではないようにおもえる。

しかし、その内容には豫言的、迷信的なものがおおく、現在においてはもちろんのこと、劉勰の時代においても、すでに全面的に信を置くべきものとはされていなかった。そのことを劉勰自身が述べている。〈正緯〉篇も「〈原道〉——〈徵聖〉——〈宗經〉」を根幹とする「經書至上主義」の文學論にあつていかにも異質の存在なのである。にもかかわらず、《文心雕龍》のもっとも根幹であるところ、すなわち「文之樞紐」を構成するものの一つとして採りあげられている。それはなぜであろうか。筆者は、《文心雕龍》の前半二十五章を背後から支えている論理的な根據を解明するのは、この問いに答えることであると考えている。

また、〈序志〉篇をのぞく後半の二十四章の論理的な存在理由を解明するには、もう一つの問い、すなわち、儒家の經書ではない《楚辭》が、なぜ、「文之樞紐」を構成するものの一つとされているのか、という問いに答えることだと考えている。すなわち、「緯書」にたいする劉勰の認識を解明することは、《文心雕龍》で論じられている文章世界の「構造」を明らかにすることになり、《楚辭》にたいする劉勰の認識の解明は、文章創作についての彼の根本的な

考え方を理解することになる、ということである。

小論では、上のような問題意識において、次のようなことを論じた。第一部においては、「文章世界の構造」について、第二部においては、「文章世界の構造から文章の創造への展開」について、そして第三部では、「文章の創造の場における問題」についてである。

第一部「文章世界の構造」の第一章「劉勰の世界観とその文章論への展開」においては、次のようなことを述べた。——《文心雕龍》は、四千年にもおよぶ中國文學の膨大な歴史においても、まれにみる文學理論書である。それがほかの文學批評書と比べて、ことに優れている點は、その「體系性」にあると言うことができる。その「體系性」は、この書の世界観の根底にある根本的な思考様式によってもたらされたものと考えられる。その思考様式とは、王弼・韓康伯の「義理易」の論理、後世にいわゆる「體用の論理」である。筆者はそれを「[本質] → [現象] の論理」と名づけておいた。

ある本質なものが具體的なかたちをとってあらわれるという論理は、ふつう「體用の論理」と呼ばれている。しかし、《文心雕龍》が書かれた時代においては、それは明確に意識化されたものではなかった。それが意識化されるには宋代まで待たなければならない。劉勰は、たしかに「思辨の範疇」としての「體用」の概念をもっていなかった。しかし、思考の「様式」としては、すでに運用していたものと思う。そこで筆者はそれを「[本質] → [現象] の論理」と名づけておいた。

この第一章は、《文心雕龍》の體系を構築する際にもっとも根底のところでは働いていると思われる根本的な思考様式は、王弼・韓康伯の「義理易」の論理、すなわち「體用の論理」、あるいは「[本質] → [現象] の論理」に據るものではないかということについて検討した。

第二章「劉勰の根本的思考様式」においては、前章の《文心雕龍》の「體系性」の根底には根本的な思考様式、すなわち「體用の論理」が作用していると考えられるという推定を、本文の記述に即して確認したものである。そしてそれを、「文體總論」と「文體各論」の内實を具體的に検討することによっておこなった。そのさい、全篇にわたって認められる「根源志向」と「全體志向」、および「智の徹底」という思考の志向性に着目した。この章は、次の章で検討する「文學原論の成立」の検討の基礎となるものである。

第三章「文學原論の成立」は、前の章において、全篇にわたってそれが作用していることを確認した根本的思考様式、すなわち「[本質] → [現象] の論理」が、いかに展開されて《文心雕龍》の「文學原論」(〈原道〉第一から〈正緯〉第四)が成立しているか、そのことの論理展開の内實を、その「人間観」「文章観」および「聖人認識」「經書認識」を検討することによって解明している。

これら、第一部で論じたことは、劉勰が《文心雕龍》で構想した文章世界の「構造」の部分に関わるものである。

第二部「文章世界の構造から文章の創造へ」の第一章「〈辨騷〉篇の構成」では、次のようなことを述べている。——〈辨騷〉第五は、冒頭のほかの四篇とともに、「文之樞紐」だと劉勰自身が明言している。にもかかわらず、それが《文心雕龍》の文章世界の體系の中でどのような位置にあるのか、また、どのように作用しているのかについては、必ずしも一致した見解のもとにあるわけではない。さまざまな議論がなされているのである。それらの議論を検討するに際しては、まず〈辨騷〉篇じたいの構成の検討が不可欠である。しかし、〈辨騷〉篇の構成を検討する前提となるべき段落わけも、やはり、一致した見解がない。この章では、従来の

さまざまな分段法を分析することによって、〈辨騷〉第五の構成を検討した。

第二章「『〈辨騷〉＝文體論』説」では、次のようなことを検討した。——「經書至上主義」の文學觀を標榜する《文心雕龍》の文學世界の體系にあって、《楚辭》について論じた〈辨騷〉篇は、たしかに異質なものと感を得る。しかし、劉勰自身が冒頭四篇（〈原道〉〈徵聖〉〈宗經〉〈正緯〉）とともに〈辨騷〉をその第五番目に組み入れ、〈辨騷〉篇をふくむ冒頭の五章を「文之樞紐」だと明言している。そうであるにもかかわらず、〈辨騷〉を〈明詩〉第六以下の文體論の中に組み入れて、文體論の一篇と考える學者がいる。それは、あらためて言うまでもなく、劉勰の意圖を無視してなされたものである。まったく妥當性を缺くものと言うことができる。この章は、そのことについて、種々の觀點から検討を加えたものである。

第三章「劉勰の屈原・楚辭認識」では、次のようなことを論じている。——《文心雕龍》冒頭の五篇は「文之樞紐」とされている。そして、その前三章は「經書至上主義」の文學觀を表明したものである。しかし「文之樞紐」の一つ〈辨騷〉第五は、《楚辭》について論じている。《楚辭》はもちろん「經書」ではない。「經書至上主義」の文學原論の論理構造の中で《楚辭》はどのような位置を占めているのであろうか。この章は、そのことを解明するための前提として、「屈原」や「楚辭」に對する《文心雕龍》の考え方について検討したものである。

第四章「『文之樞紐』の論理構造における〈辨騷〉篇の位置」は、「經書至上主義」の文學觀の論理構造のなかで「經書」ではない《楚辭》がどのような位置にあるのかについて論じたものである。その際、「構造の場」「創造の場」という概念を導入し、〈序志〉第五十で述べられている「騷に變ず（變乎騷）」という表現の「變」の内容を検討し、そうすることによって、《楚辭》は、文章世界の「構造の場」から具體的に多種多様な作品を「創造」させるためのエネルギー源としての位置を占めているという結論を導き出している。

これら、第二部で論じているのは、劉勰が《文心雕龍》で構想した文章世界の「創造」の部分に関わるものである。より正確に言えば、「構造」から「創造」へ展開していくその展開の論理構造について論じたものである。

最後に、第三部「文章創造の場における問題」の第一章「《文心雕龍》における「理」について」では、次のようなことを述べた。——劉勰が《文心雕龍》を執筆した直接の動機は、當時の文章作成の現狀に對する批判からなされたものである。劉勰は當時の文章作成の現狀に對して危機意識を持っていた。當時の文章作成の狀況は、内容の充實よりも形式の美を追い求めるものであった。劉勰はそこから文章を救おうとした。そこで、文章の模範として劉勰が提示したのは「經書」であった。しかし、なぜ「經書」が文章作成の模範として認められるのか。劉勰はその理論的根據をどこに求めたのか。それは「理」、および「神理」という概念であったと考えられる。この章では、「理」および「神理」という言葉の概念の検討を通してそのことを論證した。

第二章「《文心雕龍》における『術』の概念と〈總術〉篇『文筆論』」は、次のようなことを論じたものである。——《文心雕龍》の〈總術〉第四十四は、その冒頭に「文筆」に關する論が展開されている。それが後に展開される「文術」（文章作成の技術）についての論と論理的に一貫していないように見える。しかし、劉勰は「體系性」への意思を明確に有しており、このような非一貫性も表面的なものにすぎず、本來は一貫した論理につらぬかれているものと思われる。小論は、《文心雕龍》に使用される「術」の概念の検討をとおして、いわゆる「文筆」論の意圖するところを探ったものである。

小論、とくに第一部「文章世界の構造」、第二部「文章世界の構造から文章の創造への展開」で論じたことは、《文心雕龍》のもっとも根本的な部分についての検討である。したがって、《文心雕龍》全體にわたる研究、あるいは個別的な部分における研究は、この第一部・第二部の結論をふまえてなされるべきものとする。なぜなら、《文心雕龍》の二つの主たる部分のもっとも本質的な層における論理展開の理論的根據は、小論で過不足なく論證されたからである。この二つの主たる部分とは、言うまでもなく、《文心雕龍》の構想した文章世界の「構造」の部分と「創造」の部分である。「構造」の部分とは、〈明詩〉第六から〈書記〉第二十五までの「文體論」に相當し、「創造」の部分とは、〈神思〉第二十六から〈總術〉第四十四の「創作論」に相當する。

劉勰が《文心雕龍》で構想した文章世界のもっとも重要な部分は、劉勰自身が「文之樞紐」と述べた最初の五篇、すなわち〈原道〉第一、〈徵聖〉第二、〈宗經〉第三、〈正緯〉第四、〈辨騷〉第五である。それは、「道」から「經書」、「經書」から「文體」、「文體」から「作品」へと重層的に構成された文章世界全體のもっとも根源的な部分について述べたものである。

しかし、なぜ「道」が「經書」、「文體」、「作品」の最終的な根源となるのか。そのことについての理論的根據は、かならずしも明白に述べられているわけではない。筆者は、《文心雕龍》に認められる世界觀にその理論的根據が示されていることを論證した。それは、世界の本質である「道」が森羅萬象として顯現するように、「道」は「經書」として現れているというものである。そして、「經書」は、「經書」における「道」のように、その本質として「文體」となってあらわれる。さらには、「文體」は同様の論理にしたがって「作品」として現れることとなるのである。

そのことを明確に読みとることができるのが、「緯書」についての認識である。「文之樞紐」である五篇のなかで、必ずしも必要不可欠とは思えない〈正緯〉第四が存在している理由は、そこにこそ見いだすことができるのである。

《文心雕龍》の後半部は、いわゆる「創作論」が大半を占めている。そこでは、じっさいに文章を作成するための方法が詳細に論じられている。

《文心雕龍》が構想する文章世界の「構造」は、「道」から「經書」へ、「經書」から「文體」へ、そして「文體」から「作品」へと重層的な構造として構成されていた。そのなかの「道」→「經書」→「文體」というのは言わばスタティックで有限な「構造」となっているのである。そのことを《文心雕龍》では「文を設くるの體は常有り（設文之體有常）」と述べている。

しかし、実際に作成される作品は無限の多様性としてつぎつぎに現出してくるものである。そのことを《文心雕龍》では同じく「文を變ずるの數は方無し（變文之數無方）」と述べている。いわば有限の「構造」のなかから無限の運動としての「作品」が発生してくるのである。では、それはどのように発生してくるとされるのであろうか。その論理的根據は何なのか。劉勰の言う「文之樞紐」にあって、そのことを表しているのが〈辨騷〉第五である。

《楚辭》は、《文心雕龍》のもっとも根本的なところに認められる「經書至上主義」の文學觀において、「緯書」と同様に、異質な存在である。「文之樞紐」において必ずしも絶対に不可欠な存在ではないように思える。しかし、「文之樞紐」に《楚辭》は含まれている。その理由は、上に述べたように、「道」→「經書」→「文體」というスタティックな「構造」から、個別の「作品」が無限の多様性として現出してくるその理論的根據を示していることにあるの

である。それゆえに《文心雕龍》の言う「文之樞紐」の部分には《楚辭》についての論述、すなわち〈辨騷〉第五は不可欠なのである。

第三部は、第一部、第二部でなされた検討をもとにして、《文心雕龍》全體にわたる研究（第一章「《文心雕龍》における「理」について」）、あるいは個別的な部分における研究（第二章「《文心雕龍》における「術」の概念と〈總術〉篇『文筆論』」）を試みたものである。

《文心雕龍》については、このように全體にわたるもの、あるいは個別的な部分におけるものにおいて、まだまださまざまな検討を必要とする問題が残されている。しかし、それらについて検討するに際しては、小論の第一部・第二部で論じた「構造」と「創造」、さらには「構造」から「創造」への理論的な展開を踏まえておく必要がある。

なお、小論、とくに第一部「文章世界の構造」、第二部「文章世界の構造から文章の創造への展開」で論じたことは、すでに述べたように、《文心雕龍》のもっとも根本的な部分についての検討である。その意味では、小論は基礎的な検討に相当する。したがって、小論は、これからなされるであろうさまざまな研究の「序論」としての役割を果たすものと言うことができる。小論の表題を「文心雕龍研究序説」としたのは、そのような意味においてである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は総序とそれに続く第一部3章、第二部4章、第三部2章及び結語により構成される。

総序では、梁の劉勰の撰になる『文心雕龍』の基本思想に対する従来の研究について概述し、併せて本論文の目的を述べる。

第一部では、『文心雕龍』の文学理論を支える根本的思考様式について考察する。第一章では、『文心雕龍』本文中に用いられる特徴的な表現や語彙を綿密に検討することによって、王弼・韓康伯の易理解に認められる「本質・現象の論理」こそが『文心雕龍』の文学理論に体系性を与えるに至った根本的な思考様式ではないかとの推測を行う。

第二章では、前章を承けて、「本質・現象の論理」が『文心雕龍』に見える文体論の背後にある根本的思考様式であることを論ずる。まず、本文を仔細に検討することにより、この「本質・現象の論理」は劉勰の世界観、緯書認識に端的に認められることを明らかにし、ついで劉勰が文体を論じた部分を具体的に検討した結果、全ての文体の淵源を経書に求める「根源志向」、また文章世界に関わる全ての事柄をひとつの視野に収めようとする「全体志向」もともに上記論理からもたらされたものであると指摘する。

第三章では『文心雕龍』の文学原論の成立をその人間観・文章観・聖人認識・経書認識を検討することにより解明する。劉勰は文章表現は対象を先ず認識し、その認識したものを表現するという過程を経て行われると考えたこと、そしてその発想の根底にはやはり「本質・現象の論理」という思考様式が作用していること、文章の表現内容を明確にするためには節度ある文彩が必要であること、聖人の手になる経書は道を十全に表現したものであるが故に文章表現の模範足りうることを原文に即して明らかにする。

第二部では、『文心雕龍』「辨騷」篇を詳細に検討し、経書にあらざる『楚辭』の『文心雕龍』の文学論全体の中で占める位置づけとその作用について考察する。第一章はその基礎的研究で、先人の先行研究を十分に踏まえつつ、「辨騷」篇の内容を細かく分析し、本篇が全6段に

分段されるとし、ここに見られる肯定否定両面の評価こそが劉勰の『楚辞』評価の独創的なところであるとの興味ある指摘を行う。

第二章では、経書至上主義の『文心雕龍』にあって、文学原論たる「文之枢紐」に組み込まれている「辨騷」篇の性格について論ずる。本篇は従来文体を論じた篇のひとつと解されることが多かったが、文体を論じた各篇の記述形式の具体的検討、経書との継承関係、経書でないにも関わらず同じく「文之枢紐」とされる緯書について論じた「正緯」篇との比較検討の結果、本篇を文体論と考えるには無理があること、劉勰は『楚辞』を文体としては賦体に属すると考えていたことを論証する。

第三章では、劉勰の屈原観・『楚辞』観について論ずる。『文心雕龍』一書を通して関連するところを仔細に検討した結果、『楚辞』と経書との間に種種の面で明確な断絶が認められること、一方漢代の文章家そしてその作品との間には密接な連続性が認められることを指摘し、「辨騷」篇が「文之枢紐」に組み込まれる理由を経書との関連性に求めることは出来ないと指摘する。

第四章は、前3章における検討をふまえ、「辨騷」篇の『文心雕龍』中における位置づけについて考察し、第二部を締めくくる。『文心雕龍』は、冒頭に置かれ「文」の本質面から文章世界の構造について論じた文学原論である「文之枢紐」全5篇と、文章世界の構造（文体論）及び文章創造（創作論）について論じた残り44篇により構成されるが、前5篇の末尾に置かれ「騷に變ず」とまとめられる「辨騷」篇について多様な観点から詳細に分析検討した結果、その前半部分は文章世界の構造の面から、後半部分は文章創造の面から『楚辞』を論じたものであり、劉勰にとって『楚辞』はこのような二面性を備えたものであったとし、ここに「辨騷」篇が文体論ではなく、「文之枢紐」に置かれる理由があると結論する。

第三部では、『文心雕龍』の文章創造に関わる問題について考察する。第一章は、『文心雕龍』中に用いられる「理」と言う言葉を分析することにより、劉勰の文章観について論ずる。『文心雕龍』に見られる156例にも上る用例の詳細な検討の結果、現象世界あるいは経書の根源・本質として超越的・絶対的「理」である「神理（道）」が存在し、一方個々の事物あるいは個別の文章にもその本質として「理」の存在が認められる。この共通性こそが現象世界を文章化した経書が劉勰にとってあらゆる文章の模範とされ、同時にややもすれば本質の充実より形式の美を追求するに急であった当時の文章界に対する警鐘として『文心雕龍』が撰述された理由であるとする。

第二章は、「術」の概念の検討を通して『文心雕龍』の創作論全19篇を統括する「総術」篇の体系性について論ずる。「総術」篇には創作論であるべき篇の冒頭に「文筆論」が含まれているところから、従来一貫した体系性に欠けるとされてきたが、創作論諸篇の構成・「術」字の用例の詳細な検討に基づき、劉勰にあっては「術」は文章の表現形式のみならず、文章家の文章表現に際しての「心」の働かせ方をも包括する文章表現の過程全体に関わる概念であることをまず指摘し、ついでここでの「文筆論」は「文」の本質について述べた部分であり、本篇は全篇を通し論理的に整合性のあるものであることを明らかにする。

結語では、論文全体が要約され、今後の展望が述べられる。

以上、本論文は齊梁王朝交代期に劉勰によって著され、文学理論の専著として中国文学史上に卓越する『文心雕龍』全50篇に一貫する根本的思考様式について検討し、以て『文心雕龍』全体を整合的に理解すべく草されたものである。『文心雕龍』は四字句・六字句よりなる対句



によって構成される駢文によって綴られ、また典故の使用も夥しく、その読解は必ずしも容易ではない。考察はそのような文章を綿密に読み解くことによって進められ、『文心雕龍』の文学理論の根底にある根本的思考様式は王弼・韓康伯の易理解に認められる「本質・現象の論理」であるという新しい知見を得るに至っている。この論理が文学原論である「文之樞紐」前5篇と文体論及び創作論である残り44篇を貫き、ここに経書至上主義の『文心雕龍』の第5篇に「辨騷」篇の置かれる理由を見出すとともに、「総術」篇が「文」の本質を論じた重要な篇であることを明らかにしたのは、『文心雕龍』を思想的に統一あるものとして理解しようとする新しい視点として注目される。そのほか、本論文によりはじめて明らかにされた文学史的知見も少なくない。なお吟味を必要とするところもないわけではないが、総じてその成果は今後の『文心雕龍』研究に新しい局面を開くものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。